

本年度の住宅部門の応募は、個人住宅・共同住宅（大規模集合住宅も含む）・店舗併用住宅を併せて合計57件であった。各審査委員の投票による書類審査のうえ、14件を現地審査対象とした。その結果、表彰作品として、最優秀賞1件、優秀賞9件（個人住宅8件＜併用住宅1件を含む＞、共同住宅1件）、アピール賞1件（個人住宅）を選出した。

表彰作品は、書類審査による一次選考、現地視察による二次選考を経て選出された。一次・二次選考ともに、各審査委員の投票及び合議によるものである。特に、視察による二次選考では、書類に記された設計主旨と実際の室内空間のスケールやヴォリューム、あるいは、各部屋の関係性や仕上げ材料などの適合性といった観点、加えて、視察で初めて知り得た周辺環境との関係性などをもとに広く議論を行った。

議論を行うにあたっては、作品評価の基準として昨年の住まいのあり方としての内と外の関係性を重視したことを振り返り、今年度の基準としては、新たに、住宅づくりの問題提起をしていること、永く住み続けて行けること、そして、誰もが安心して生活できること、といった観点も重要視することを確認した。

今年度は魅力的な作品が多く、視察した全作品について、その特徴とともに、評価できる点、あるいは改善が望まれる部分などを挙げながら白熱した議論を行った。その結果、最終的には本年度は、最優秀賞1件、優秀賞9件、アピール賞1件を選出したのであった。

以下、最初に表彰作品として最優秀賞について触れたい。

最優秀賞は、「大和町団地（フロール横浜山手）」である。詳細は「選評」に譲るが、従来の集合住宅に共通する間口が狭く奥行き長い住戸形式に代わり、通風・採光が確保できる広い間口の住戸形式を提案するなど明快な問題提起がなされた作品である。こうした提案が、神奈川県住宅供給公社の賃貸住宅で実践される意義は極めて高く、住宅の質を根本的に変えようとする強い意識の窺える作品であり、その点が評価された。

次に優秀賞を紹介したい。

「HOUSE 119」の作品名は、ご夫婦が消防署勤めをしていることから名付けられた。敷地は台形状の角地で、南側には河原が広がる場所である。一面に広がる景観を妨げる電線を視界からはずすため、基本階を1階と2階の中間に設け、室内からは豊かな景観を獲得している。また、床を持ち上げたことにより生まれた床下を床下広場として開放する一方、子供室の床は通常の1階床レベルとして天井の高い空間とするなど床の高低差を活かした楽しい空間を生み出している。そうした点が高く評価された。

「GATE SQUARE 小杉陣屋町（THE KAHALA 小杉陣屋町・THE RESIDENCE 小杉陣屋町）」は、江戸時代から続く旧家の広大な敷地に建てられた分譲集合住宅と中庭を挟んで隣接する賃貸集合住宅からなる。賃貸集合住宅の一郭の広場には地域の歴史性の継承をめざした陣屋門やお社が残され、また、分譲集合住宅にも旧家の門や灯籠などを移設するなど、かつての歴史性・地域性の継承を意図した計画とそのデザインが評価された。

「SHICHIRI-Y」は、RC造のローコスト化の中で生まれた2.8mスパンで30cmの太さの柱と梁による構造を視覚化した住宅である。建物配置でも、建物を少しずらしたり、玄関を海の見える2階に設けたりする操作は、周辺環境との関係性から生まれたものといえ、評価できる。ただ、この躯体の中に木造による諸室を設けるデザインは、box in boxの徹底さがほしかったように思われる。その点が惜

しまれる。

「王禅寺東の家」は、両親との二世帯住宅である。外壁を屏風風に折った立面は、図面よりもはるかに変化が感じられる。2階の床に高低差を設けることにより、窓配置も個性的でランダムさが感じられるが、開口部の多くがフィックスになっているのは通風などの問題もあり、再考すべき点と思われる。若夫婦の2階は、居間に巨大なテーブルを配置し、多様な使い方による独特の生活スタイルを提案している点も個性的である。

「大磯の家」は、富士山と相模湾という自然の豊かな眺望を獲得した神奈川らしい住宅のひとつである。山と海の眺望を楽しめるように内部のデザインも、開口部の位置や床の高低差などを丁寧に計画しており、居心地が良い。惜しむらくは、2階の窓からの眺望を邪魔する電線が見えないような工夫があってもよかったように思われる。

「小高町の家 横浜のオフグリッドハウス」は、自然との関わりを考えながら生活することをめざし、その一環としてソーラー発電による電力を主エネルギーとする省エネルギーをめざした建築である。空間デザインについては、表側の吹き抜け空間は、開放的で気持ちが良い。ただ、ソーラー発電の電力を備えるバッテリーの保管施設などは建物の裏側に配置されており、諸設備と建築デザインの新しい関係を提案してほしかった。

「番田の住宅」は旗竿敷地の住まいで、周辺環境に良好な景観を得られないという問題があり、その解決が主テーマであった。生活の中心である居間の環境を確保するため、平面中心に据え、トップライトで光を取り入れるよう計画し、周辺環境が変わっても居間の環境は現状維持が出来るように計画している。全体として、統一感のある計画された住宅である。

「中道さんの家」は、店舗付き住宅である。住宅は変化に富み、個性的だが、雨仕舞などの処理にもっと工夫がほしかった。住宅内部も床のレベル差とともに仕上げ材料も多様で、独特の雰囲気を感じられる。「中道」の名称は、周辺地域の特徴である細い路地のような通りを敷地内に持つことから付けられたという。この中道は1階店舗への通りでもあるが、その先がよく見えないのは惜しまれる。駐車場も使われていない場合は、魅力的な広場ともなり得るし、中道との関係からもっと提案があってもよかった。

「緑道のある家」は、そのネーミングのように緑道に接する魅力的な敷地に建つ住宅である。敷地が周囲より高い位置のため、アプローチも雰囲気があり、内部も屋外の空間をうまく取り入れた開放的な造りで、魅力的な空間となっている。ただ、緑道のある南側に開口部が集中する反面、北側が閉じており通風などの問題が感じられる。また、敷地の魅力を住宅に取り込むという中からのデザインが強すぎ、全体的に閉鎖性が感じられる点が惜しまれる。

最後にアピール賞を紹介したい。

「片瀬のひらいた家」は、アピール賞（福祉）に選出された。車いすで不自由なく生活できることを配慮した室内のデザインに加え、住宅前の路地 テラス - リビングルーム 個室と繋がる空間のヒエラルキーを明快に表現し、周囲の人々がいつでも声をかけ、見守れる住まいを提案している。その手法は素朴だが、今後の住まいの原型にもなるものであり、その点が評価された。